

この前新年がはじまつたかと思いきや、もう四月、日新年度の始まりです。

我が長崎北道場でも六名の小学校六年生が卒業です、たいへんおめでとうございます。

まずは、「両親や親戚ら身近な方々にまず感謝の気持ちが大切です。そして合氣道を指導してくれた道場の指導者の方々にもありがとうございます。」

それぞれ今月からは期待と新しい世界への不安とが交錯した気持ちで中学校へ進学です。合氣道を中学校になっても続ける子、部活などが忙しくてやめる子、様々でしょうがさらに自分を高めながら、辛い時は、岩屋中学校の武道場で暑い時も寒い時も稽古に打ち込んだ日々を思い出すと、気持ちがあすきりする筈です。

道場から気持ちだけで、すが、六名の子にさる石材

店にご依頼して六個の名石にそれぞれ一字の言葉を彫っていたいただき、六名に石を伏せて順番に取ってもらい、卒業記念にさせていただきますました。

その言葉は、道場長が考えてくれましたが、それぞれいただいた子どももの胸にぐつとせまるものがあったようです。

「心」「力」「友」「忍」「和」それに「氣」以上の六文字でした。

第三百八十四回有段者交流研修会について

平成十九年十月二十一日、日曜日十二時から熊本市公德会において第三百八十四回有段者交流研修会が行われた。

この日は、九時までの仕事を終えて九時十分発の熊本行きの高速バスに長崎から乗り、研修会の会場である公德会に着いたのは、十二時三十分ぐらいであった。

既に、研修会をはじめっており、砂泊先生の話は聞いているものの、話されている内容は出入り口の外であったため、聞き取ることは困難であった。

道着に着替えて浜田師範長に挨拶を終え、座ったままでのあや取りの呼吸力から参加し、その後、両手取り、同じく両手取りの呼吸力が行われ、先生はそれら呼吸力を行う際に必ず一人ひとり手に取って指導され、さらに途中でも同じように一人ひとりに手を取らせ説明され、年齢を我々に感じさせない先生の動きには、驚くばかりであった。また、先に野瀬さんの車にて参加している野瀬さん、村里さん、吉田さんに会釈し、互いの研修会に参加している労をねぎらった。

今回の研修会において、

北道場からの参加者は、浜田、野瀬、村里、吉田の四名であり、一同「今日の研修会はよかった。」という話である。それというのも、体捌き後の呼吸力の前までは、入り身と小手返しであり、基本的な動きを教わったということである。なお、私は、今回の研修会には、呼吸力から参加したため、入り身及び小手返しについては、説明を省略する。

研修会で行われた呼吸力は、どれもいつも行われているものであったが、今回特に感じたのは、自分の体の中に力が少しでも入っていると必ず、止められるというか、止まることを痛感し、さらに一歩進んだところでは、気持ちも「崩してやるう。倒してやるう。」という攻撃的な気持ちがあると、いくら体の力が抜けていても、相手はピクともしないということ

を感じた次第であった。

今回の研修会で先生が技と合間に話されたことは、「絶対に力を入れてはいけない、力を抜くことは極意である、植芝先生の精神が技となって現れなければならぬ、合氣道の目標は地上に樂園を築くのであり、その樂園とは一人ひとりの心の持ちようである等」の内容であった。

研修会は午後一時半頃まで行われ、その後本部道場にて座談会及び座談会最後は先生のハーマモニカで終了し帰路についた。

また、熊本行きの高速バス内で「海猿」が放映され、内容は今から海上保安庁で働くための新任職員十四名を養成する学校での生活が描かれるものであり、訓練は重いものを持つての水中訓練や、陸上でのボンベを着装しての階段登り等の活動の内容であ

り、厳しい学校の生活が繰り広げられるものであった。

2P  
そして本映画の見所は、教官を演ずる藤竜也が、口では部外者と喧嘩等をして型破りをする学生を叱るが、仲間を見捨てず一緒にあって喧嘩したことを、心の中では理解していたことが何とも言えないところが、さらに、水深四十mのところ二人の学生が事故に遭遇して、ギリギリのラインで助かり、その事故があったことにより委員会にかけられましたが、教官及び学生が一つにまとまり、委員会の委員に事故を何事もなかったようにしたのが見所であったように思われ、私は一人ひとり「仲間を想う気持ち」に胸をつたれた。

バスの中であまりテレビを観ない私であったが、はまって観たのは久しぶ

りであった。映画を観終えて感じたのは、人間は「人を想う気持ち」が大切である。」ということである。

「人を想う気持ち」は、社会及び日常生活の中においても大切なことである。通している基本的なことであり、また、合気道の教えも「人を想う気持ち」が重要なことは先生から常日頃教えを受けている。

今回の研修会においては、先生の教え及び技の指導、バスの中で観た映画、いずれもが勉強になり、今後も修行精進して行こうと思った。(瀨田)

「さらば、友よ」

年度末も押し迫った去る三月二十九日(土)朝、携帯電話が鳴った。電話やメールでのやりとりもあって、既に登録済みであったため学生時代の親友である信成氏(かなり変わった苗字で、国内でも数える

くらいの家系しかない)と聞いていた。以下、生前の厚情に対する親しみを込めて信兄という(からの電話であることはすぐ解つた。

しかし、ここ一ヶ月程は音信不通で、彼が年末に手術した腸部深くのガン摘出の経緯がよく解らないままこちらで心配な日々を過ごしていたため、もしやという直感にはした。

悪い想像は当たるもので、電話は信兄の次女さんからであった。涙声で「昨夜、父が亡くなりました。最近は何度の体で意識も朦朧としていたのですが、三日前に少し意識が回復し、その時もし自分になにか万が一のことがあれば九州長崎の に連絡しておくれと。それが最後の父の言葉の一つでした。通夜と葬儀はそれぞれ三十日夕方、葬儀は三十一日十

三時、斎場は相馬市の・・・」あとは次女さんも必死で涙をこらえているのが電話口でも推察でき、こちらも斎場の名前をメモするのが精一杯で電話を切った。

信兄は一昨年の十二月に胃ガンの手術を行い、その後昨年二月に相馬まで見舞いに行った時は完全に回復していたのである。しかし昨年夏頃から腸閉塞で再び体調不良との連絡をもらい(今思えば胃ガンの転移か)、十一月下旬に見舞いに行ったのが、今生の別れとなった。

年度末の忙しい時期で葬儀に駆けつけることもできず、取り急ぎ甲電とお花をお供えさせてもらうだけとなったが、お盆までには墓前にお参りに行きたいと思っている。身近な親を亡くすのはまた別の意味で友を亡

くすのは辛いものと、同時に今の平和な社会に感謝である。というのも、もし戦友として出会っていたら、想像であるが信兄は気弱な小生を叱咤激励して行軍するか、小生の身代わりに・・・それくらい正義感に富む、一本気のいい友でした。

ちなみに 兄という言い方は亡き父が戦友らとの思い出のアルバムの中でもよく記載しており、若い方にはピンと来ないかも知れませんが、古くからの親しい仲間にはびつたりの呼び方です(辞書にもあり)。

おりしも南国九州は、数日の花寒的な気候で持っていた一本桜がちょうど身頃となりました。今年の桜は小生にとって想い出深い、また今は亡き信兄を偲ぶに相応しい花となることでしょう。